

MEETING REPORT

The Annual Meeting of The Institute of Human Virologyに参加して

病理学研究部

竹内 一

この度、幸いにも医科学研究所国際交流基金の助成を受けて、9月7～13日にアメリカメリーランド州ボルチモアで開催されたThe Annual Meeting of The Institute of Human Virologyに参加しました。

このmeetingは、retrovirus患者、特にAIDSについて、ウイルス学の基礎研究から、治療についての臨床的研究まで幅広い領域について情報交換を行う目的で開催されました。特にAIDSについては、HIVの感染に必要な宿主細胞の因子(chemokine receptor)の発見や、カポジ肉腫の原因のウイルス(KSHV)の同定などのhot newsが相次いだ直後であったこともあり、関連の演題が多数報告されました。

学会は口演と示説を併せて、約430の演題でそれほど多い数ではなかったのですが、これらの発表が基本的に1つの会場のみでおこなわれるため、発表時間が朝8時から夜7時近くまでかかり日本の学会に比べスケジュールがハードでした。私はATL細胞で発現



University of Maryland Biotechnology Institute

量の変化している遺伝子についての発表を行いました。同じ分野の研究者とディスカッションができて実り多いものでした。ただmeeting全体の印象としてはHTLV関連の話題はAIDSに押され気味であったようでした。

また、学会中に University of Maryland Biotechnology Institute、Institute of Human VirologyのR. Gallo博士の研究室、NIHのG. Franchini博士の研究室を見学でき、さらに Franchini、N. Young博士夫婦の自宅

に招待され、A. Gessain博士らと話げたことは大変に刺激になりました。最後に、本資金の設立および運営にたずさわってられました全ての方々に厚く御礼申し上げます。また、今後も引き続きこの助成によって一人でも多くの若手研究者が、海外で開催される国際学会に出席し発表、討論できる機会が与えられることを願って止みません。

編集後記

年が改まって平成9年となり、本号では吉田所長の年頭の挨拶を掲載しております。医科研が懸命に将来を模索している様子を、ご理解頂ける事と思い

ます。良い事ばかりではありません。改革に伴う「いたみ」をどの様に分かち合うのか、とても大切な問題です。しかし私は心配していません。表紙をご覧下さい！医科研はいつもみんな一緒に前進しています。

今回は初めての試みとして「COLU

MN」の欄を設けました。今春、学位を取得されて韓国に帰国する朴さんに医科研での留学生活について書いて頂きました。斬新なアイデアや辛口の内容を含め、できるだけ皆さんの意見の交換の場にして行きたいと考えています。⑩